
スパイズ(普通の勇者の物語)

虫松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイズ（普通の勇者の物語）

【NNコード】

N8747Y

【作者名】

虫松

【あらすじ】

魔界のプリンセス、ナターシャ スパイは憧れの勇者様に会つて、ロマンチックな恋に堕ちる野望を達成させる為、様々な障害を突破する。

第一話 魔界のプリンセス

魔界のプリンセス、ナターシャ スパイは爺や事、大魔導士、ゲラハーゴンより王女の間で魔法の勉強を講義を受けていた。

「スパイ様、魔法には火、風、土、水の基本がございまして、それらは互いに反発しあっています。例えば通常の魔導士は火の魔法が得意なものでは水の魔法は使えません。

また・・・」

（退屈だわ・・・勇者様ってどんな人なんだろう、白馬に乗ってるのかな。

一瞬でモンスターとかなぎ払つて、あつという間に、あー会いたい

「スパイ様、スパイ様！聞いておられるのですか！そんなうつろに聞いておられては魔界界のお姫様としては失格ですぞ。我々、上に立つものは下に見本として・・・

（つまらない。何この軟禁生活は、早く外の世界に出て、勇者様にあつて、激しい愛に堕ちていって、
けして結ばれてはいけない禁断の愛！素敵だわ。ロマンチックはあー燃えるような恋！）

ナターシャ スパイは17歳になる。魔界のプリンセスである。

八重歯が印象的で身長は170cmほど、
髪はロングにポニテール、赤いリボンをつけている。
黒いドレスに右手には、悪魔の杖という。

一つの田悪魔の武器、

田のトトに口がついている。一本の牙ねじり棒
めちやくちや、おしゃべりである。

「スペイ、爺やの話全く聞いてなかつたなあ。」

「飽きちやつた。同じ話ばっかり。この魔界は化け物ばっかり。
ロマンチックの欠片もないわ」

スペイの言つてるとおり、魔界には3mほどの中ノタウロス（牛と
人の化け物）や

地獄の番犬、ケルベロス（頭が3つある獰猛な犬）　首のない兵士
デュラハーン（片手で斧持つた騎士）
など地獄形の魔物達がお城を警備していた。

「何か口実をつけて、この城を出てく方法はないかしら？」

「やうだなあ。勇者討伐とか、でもお姫様じゃない奴らがいくよな

この魔界において唯一気兼ねなく、本音で話せるのは、悪魔の杖だけだった。

（父（魔王）に直談判するしかないわ。絶対、勇者様に会つんだから！）

「おこおこ、よからぬこと考えてるんじゃないの￥（／＼／＼）

¥
-

悪魔の杖を握りしめ、スパイは魔王の部屋へ向かうのであった。

第一話 大魔王

「ダメだーあああ。行かせるわけないだろーうがー。」

魔王のお城の、王の間 大魔王 ダークドラゴンの声が児玉した。大魔王、ダークドラゴンは体長は10mはあるつかという。大きな体格、太っている、デブであるゆえに空を飛ぶ事はできない。

「でも、でも、外の世界も見て見たいし、ついでに勇者も倒しちゃうみたいな。いいじゃん！」このデブ親父！」

「何と、この大魔王に向かつて口の聴き方！娘で、なければ火炎プレスで

焼き焦がしくれるわ」

「やれるもんなら、やつてみせなさいよ、」

(ちょっと、それはまずいんじゃないの)

悪魔の杖は冷や汗をかいだ。

「ミノタウロス、スパイを部屋に連れ戻せ！」

両脇にいた。2体の魔王のミノタウロスはスパイ姫を捕まえようと右腕と左腕を伸ばした。その瞬間

スパイはミノタウロス肘の関節をひねり1体を転ばせると2体目を悪魔の杖で頭を跳ね上げた。

「スパイをみんなでとり押さえろ！」

沢山のミノタウロスが扉から出てきて

スパイは両脇にミノタウロスに抱えられ中を浮いた。

「死ね、クソ親父！」

ミノタウロスと一緒にスパイは王女の間に連れ戻された。

（ここなに、おでんば姫にそだつとは・・・）

大魔王、ダークドラゴンは誰もいなくなつた王室で一人ため息をついた。

第三話 格闘訓練所

スパイは格闘訓練所へ向かつた。

むしゃくしゃするので暴れてすつきりする為であるが。
スパイの強さは折り紙付きであつたので、誰も相手をしたくなかった。

「オーガーさつさと前に出てこんかい！」

オーガー、巨大な力をもち日本の鬼に当たる魔物。

「スパイ姫、今日はもうこのへんで」

「何だと。まだ始まつたばかりだろ？が！」

あたりを見回すと、沢山の魔物が倒れ、治療室へ搬送されていた。骸骨兵士は粉々に砕け散っていた。

「そつちが、来ないといいうなら。ダークネスファイヤー』【火の属性】

悪魔の杖を天高く掲げると、空から沢山の炎の塊が降り注いだ！

「ぎゃあああああー！」

「火事だ、急げ消化部隊！」

燃え上がり、熱くて暴れ回るオーガーに水龍の放水が始まつた。

「スパイやり過ぎじゃない」

「いんなもんじゃ、私の怒りは収まらないわ」

「スパイ姫さまー。何をしていらっしゃるのですか？魔法の勉強の講義はとつくに始まっていますぞー！」

大魔導士、ゲラハーゴンが格闘訓練所に現れた。

「爺や。お前が私の相手をしてくれるのか！」

「えー。スパイ、大魔導士はマズイよ。」

「ほほほほー、スパイ姫様の退屈しのぎに付き合いますかな」

大魔導士、ゲラハーゴンは大悪魔の杖を両手に持った。
ゲラハーゴンは頭が脳みそで3分の2覆われている。
白ヒゲと身長は150cmと小柄なおじいさん。

「ダークネスファイヤー！」

スパイは先ほどと同じように悪魔の杖を天高く掲げると
空から沢山の炎の塊が降りそそいだ。

「アイス ストーム」【水と風の属性】

ゲラハーゴンは両手に持つた、大悪魔の杖から。
冷氣の風がふき、炎の塊を固め。吹き飛ばした。

「実践、授業の始まりですな」

「アースクエイク！」【地の属性】

スパイは悪魔の杖を地面指すと地面が割れ、グラハーゴンに向かつて亀裂が走り。地面が割れた。

「ほほほほほ！　マグマ　ハリケーン　」【火と風の属性】

グラハーゴンは宙に飛びスパイの足元が割れ地下からマグマが吹き出した。

同時にハリケーンが襲ってくる。

「スパイ、もうダメだ、降参しよ。大魔導士は水風土火全てを操れるスペシャリストとても魔法じやかなわないよ」

「ならば、格闘で脳みそぶつ叩くのみ！」

スパイは悪魔の杖を両手で握りしめた。

第四話 家出

「ファイヤーフレイム!」【火の属性】

スパイは周囲に囲っていたマグマをスパイは悪魔の杖を横に振りスイング炎の壁を作り突破した。

「ハリケーン来たよーどつするの?」

「アースウォール」【地の属性】

悪魔の杖を地面に刺しながら横に走りながら線を引くと、

ハリケンの前に土の壁が吹き出した。ハリケーンは土の壁と激しく衝突した。

(後、30mで爺の頭を殴れるわ)

スパイは爺や目がけて真っ直ぐに走り出した。

「ほつほつ。流石、スパイ姫様よくぞ突破されましたな。」

(後、20m)

「でも、まだまだ教えてない事もあるのですぞ」

(後、10m)

「バブルスリー卜」(睡眠させるシャボン玉)【水と魔の属性】

爺や事、ゲラハーゴンの大悪魔の杖に口から泡が無数に飛び出し
スパイ姫に向かつて排出された。

(後3m・・・・)

スパイは悪魔の杖を振りかぶった状態で目がウツロとなり。後ろへ
倒れた。

「ぐがああああ、ぐがあああ！」

「大魔王ダークドラゴン様に劣らないイビキ・・・ほほほほほ」

スパイ姫はベットに寝かされていた。
時計を見ると23時を差している。

(くそお、もう一歩だったのに。)

「スパイ起きたのかい。ゲラハーゴンに戦いを挑むなんて。むちや
くちゃだなあ」

「こんな生き地獄みたいな生活、もう我慢できない」

「まさか家出する気じゃないよね。僕は嫌だよつてあーあ

悪魔の杖を片手に飛竜にまたがったスパイは勇者の元へ飛んでいく
のだった。

第五話 フィアンセ

「何！スパイが飛竜に乗つて家出しだと…」

「はい、見張りのものが確認しました。」

魔王、ダークドラゴンと大魔導士ゲラハーゴンは王の間で部下の報告を聞いていた。

「どういたしますか魔王様、姫は無理矢理連れ戻せば、多くの犠牲がでます。」

「もつと、おしとやかに育てれば良かった」

魔王は頭を抱えた。

「「」の魔界で生きていく為には、おしとやかには育てる環境ではあります。」

何せ地獄の番犬やら首なし兵士、巨大なミノタウロス、死の世界。花も緑もないのですから。」

「育て方はともかく、連れ戻さないと。面倒なことになる前に」

「フィアンセのベルゼブブ（ハエの王）に迎えに行かせましょう。」

（あいつ人間の姿の時はかつこいいんだけどな。魔人化すると『力イハエになるんだよな』

「まあ実力的にはスパイに勝るにも劣らないな」

(ただ、かなりスパイには嫌われていたような)

「フィアンセの説得ならスパイ姫も納得するでしょう。
おい、早くベルゼブブを呼んで来い！」

兵士は数分後、ベルゼブブを王の間に呼んできた。

「愛しのスパイ姫、必ずや連れ戻してみせます。」

ベルゼブブは魔王と大魔導士の前に右腕を前に
出し貴族風の挨拶をした。

ベルゼブブは擬人化していた。背丈は190cm。痩せ型、気高い
紳士のような

格好をしていて、中々の美男子である。
白い肌、綺麗な目。普通に街を歩いていたら
カツコイいいと女性群から注目を集めめるだろう。

「つむ任せたぞ、ベルゼブブ。姫は気性が荒い。手荒な真似はする
な。」

「お任せあれ！そつれ

ベルゼブブは『デカイハエとなつて、飛んで行つた。

第六話 勇者は哪里へ！

「でもさあ、勇者って何処にいるのー？」

飛竜に背中に乗ったスパイと右手に握られた悪魔の杖は問いかけた。
夜空の月に向かって飛竜は飛んでくる。
飛竜は体長、三三ほど、自動車くらいの大きさである。

「何処にいるって、考えなく出つてたから知らないわよ」

（あーあーお腹が空いたとかいつて帰つてくれないかな、今まで姫様級のいい暮らししてたんだぜ。いきなり平民の暮らしとか無理でしちゃう）

悪魔の杖は目を細めてスパイを見た。

「何よ、その～田は？～どつかのお城とかに行つて、王様とかに挨拶してゐるはずよ。そんなもんじやない。ロールプレイングの勇者つて」

「そ・・・・・そだよね。早くお城に行こつか。
(はあー長くならなきゃいいけど。)

「まずは冒険者が最初に訪れる、アルベルト城へ！」

スパイの飛竜は東へ進路を変えた。

その後ろにベルゼブブのハエが追いかけていた。

(スパイ可愛いよスパイ。逃げても逃げても追いかけて見せるよ
君の匂い体臭は決して消すことはできない。僕の嗅覚は
ハニのように以上に発達しているのさ)

その頃、勇者は、アルベルトの城で王様に冒険の旅立ちの報告をす
ませ。

次の町。カザフの町の宿屋に宿泊していた。ベットに横たわり横の
窓から

星空を見る勇者。今日は月が満月、何か得した気分になる。

(これから、一人旅は辛いよな。そうだなあ僧侶は必要だよな。
戦士も欲しいよな。
魔法使いも全体攻撃できるし。武闘家も素早く攻撃できるよなあ)

とか考えながら眠りについていた。

第七話 王様訪問

2日後の朝というか早朝にスペイ達はアルベルトの城に到着した。飛竜はクタクタになり城壁に寄りかかっている。

「遠いねえ。さすが最初に勇者が訪れるよつて設定されてるな。」

「何それ！誰かが作り出した世界みたいじゃない。」

（今まで勇者つて沢山いたけど。みんな魔王様が抹殺してたんだよ。）

朝5時にアルベルト城に入りつとすると兵士に呼び止められた。

「まだ、王様は眠つていらっしゃる。10時にまた来てください。」

「私はすぐ急いでいるんです。」

「いやあもう言われましても、王様は公務でお疲れの身、今すぐ会わせるわけには参りません。」

2人の兵士は槍でバッテンにトウセンボをした。

「スペイ、朝ご飯でも食べに行こうよ・・・」

「つ、杖がしゃべった・・・」

「・・・」

（じこつ、今から心臓えぐり出して田の前で握りつぶしてやるつか・

いや、ここで騒ぎを起こせば、勇者様に会えなくなるといつか魔物扱いだわ)

「また、後で来ます……」

スパイは両拳に力を入れぐつと耐えた。
その後、カフェレストランで食事をとり「コーヒーとシューガートーストを頼んだ。いくらか気分も晴れた。

「じゃ、行きますか」

「お客様お代金を、お忘れですよ。」

「えっ何それ？お金なんか持つて来てないわよ」

「まあどうしましょう。あなた、無銭飲食って言つて罪になるのよ。誰かお金持つて来れる人はいないの？」

お店は不穏な空気が流れた。

「フイアンセである僕がお支払いします。」

ベルゼブブが擬人化してスパイの前に現れた。

(良かつた~ベルゼブブ様じゃん。これでスパイも魔界に帰るよね。)

「……」

「どうしたんだいハニー。フイアンセの僕が突然現れて嬉しくって

感動しちゃつたんだね。わかるよ B A Y B E」

ベルゼブブがスペイの肩に腕を回そうとした肩に触れる瞬間だった。

「このハエ男が！――！」

ベルゼブブは悪魔の杖でスイングされお店の端まで吹っ飛んだ。

「おう、ハーハー手荒い感動的な仕打ちありがと！」

「だ・・・大丈夫ですか？」

「OK大丈夫。いつも事なんで、愛情表現つて奴だろハーハーつてい
ない・・・」

スパイはさつさとお店を出て王様に会いにお城に入つた。

第八話　お金

スパイはアルベルト城に入った。中は食堂、兵士の宿舎、馬小屋、武器庫、教会など兵士が巡回していた。

(ショボい城だわ。魔王城の100分の1程度ね)

スパイは謁見の間に入り王様に会った。

王様は中央の玉座に座っている。横に大臣らしき男がいた、白いヒゲと王冠と赤い服着た誰がみても王様だ。

「そなたは名はなんと申すのじや」

「ナターシャ　スパイと申します。」

(はて何処かで聞いたような名前じやな)

「何処かの国の王女さまかの？」

(そんな事はどうでもいいんだよ)

「いいえ。勇者様は、こちらに来られませんか？」

「勇者殿は3日前に旅立たれた。」

(しまつた入れ違いだつたか)

「勇者殿の協力者であるな。」に準備金、銀貨100枚ほどある。
お渡しいたそう

スパイはお金を貰つた。

(何か、いい奴じやん、こいつ)

スパイは気分よく、お城を出て行くのであつた。

悪魔の杖は色々、突つ込まれると面倒なのでお城の中では田を闊じだまつっていた。

「はあーこれから、どうするの?..」

「とりあえず、お風呂に入りたいわ。宿屋に宿泊するわ

「しかし、世の中ってサービス受けけるのに、お金を払わないと罪になるのね。」

「や・・・そうだよ。」

(もしかして楽しみ始めちゃったのかな)

(愛しのハニー発見!…そつだ魔王様に報告せねば。)

ベルゼブブは伝令用の小蠅を飛ばした。

その頃、勇者は、始めての洞窟探検で入り口へやって來た。

(薬草5個、毒消し草5個、たいまつ5個、これだけあれば大丈夫だろう、

誰か、明かりをつけられる魔法使いや僧侶がいればなあ楽なんだけ

(ビ)

とか考えながら洞窟内に入つていつた。

洞窟のモンスターは手強く半分ほど来て引きかえした。

(やつぱり仲間いないと厳しいわ、敵の数も結構いるし。)

勇者はカザフの町に戻つてきた。

(また。道具屋で薬草買わなきや。お金かかるなあ。世の中つて・・・
・・)

第九話 翼点

スパイはアルベルト城下街で買い物をしていた。下着にタオルにクシにお菓子。

「お菓子は買はずぎじゃない。」

「魔界には、こんな美味しいお菓子なかつたもん。」

（もう半分以上、使っちゃよ。お姫様はいいねえ。金銭感覚なし）

悪魔の杖は最初はもの珍しそうに街の人見られ、たずねられていたが

慣れたようだ誰も話しかけて来なくなつた。

「ものしゃべる武器つて、売つてないみたいよ。」

「まあ僕は一応、魔界でも珍しい魔装武器だからね。」

「売つたらいくらになるのかな？」

武器屋に聞いたら、お引き取りできませんと言われた・・・

「売るつて！値段つけられないよ！」

（困つたら売る気なんだ・・・ヒドス）

スパイは雑貨屋で香水と聖水と口紅を買った。

「あれ？化粧なんかしたつけ？」

「あの後ろにいるストカーのためよ」

(ベルゼブブ様、わかりやすいよー尾行してるの)

（さて、魔界に連れ戻すタイミング難しいな）
ベルゼブブは店の外でスパイ姫の買い物の様子を壁に寄りかかり右手を口にあて見つめていた。

スペイは購入した香水を体につけた。

「あーベルゼブブ様、対策か」

街の外にいる飛竜を迎えて外に出た。

(あつベルゼブブ様だ)

「やあスペイ！待つてたよ。お父上も心配されてる。一度
境界」窓つてねゞーうゞあらう。

「嫌だ！まだ勇者様に会つてないし」

「そ、うか・・・・・手荒なまねはしたくなかったんだが」

プシュ！

スペイはベルゼブブの顔に香水をかけた。

「ぐわあああくつかせえええよーあああくつかせええええ」

ベルゼブブは鼻を抑え苦しみ悶えた。

(ベルゼブブ様匂いにちょーーーう敏感だからな。かわいそう)

そして聖水を周囲にまんべんなくかけた。

「『ラツ！逃げたつてすぐ追いかけてみせるからなあ

聖水を巻いた地面は青白く光つた。

「しつこい男は嫌われるわよ」

飛竜にまたがったスパイは空へ羽ばたき
カザフ町の方向へ飛んで行つた。

第十話 仲間

勇者は洞窟の近くの城、サルバトーレ城の城下町に入った。
武器屋、道具屋、宿屋、教会など一通りある。

勇者は武器屋に行つた。

（新しい武器を買って洞窟に行きたいけど、高いな。誰か金持ちみ
たいな人
はい買つてあげますみたいな人いないかな？）

武器はお金がだいぶ足らなかつたので、
教会へやつて來た。

小さい教会だが雰囲気はある。
厳かな感じだ。イエスキリストの十字架
が中央にステンドガラスが周りにある。

「もしかして勇者様ではないですか？」

「はい、そうですが」

教会の神父さんが話しかけてきた。

「実は息子のシモンと一緒に魔王退治に連れててもらえないでし
ょうか」

「えついいんですか！」

「はい、是非勇者様のお力添えをさせていただきたいのです。」

神父さんに連れられて部屋の奥へ息子のシモンを紹介された。

僧侶シモンは坊主頭に田は細い。
体はある程度鍛えている。

170cmほどである。身なりは布の服を
着ている。

「勇者様の旅に是非、私を同行せてくれださい。」

「 もうらん、 じゅりじゅり、 よひじく」

勇者と僧侶シモンは硬く握手した。

（良かつたこれで洞窟の奥まで行く事ができるな。助かる～）

その頃、スペイはカザフの町で勇者が洞窟に向かったの情報を
得た。

「中々、会えないわね。勇者様。スペイは今すぐ会いたいの」

「でも1日前にいたみたいだから、もう会える感じじゃないの」

「何で自己紹介すればいいのかしら」

「とりあえず魔法使いだよね。戦士もあるな。龍使いもあるし」

「よし、ドラゴン魔法戦士にしよう、一人三役！何か凄い貴重な存

在じやない！」

（そんな職業ないけど、まあいいか。本当は魔界のプリンセスだよ
ね）

スペイは飛竜にまたがり洞窟へ向かつた。

第十一話 ゴブリンの洞窟

スパイは勇者より先に洞窟についた。

この洞窟には多くのゴブリンが住んでいるため
ゴブリンの洞窟と呼ばれている。スパイは一番奥の
地下5階のゴブリンの間で

親玉ホブゴブリンとお茶を飲んでいた。

ゴブリン（小型な邪悪な精霊。棍棒を振るう知能は低い）

ホブゴブリン（大きなゴブリン、知性は高い。斧と鎧を装備している）

「まさか、スパイ姫様が遠路はるばる来て頂けるなんて、オラ至極
幸せ・・・」

「もう良い、建前は！ そんで、勇者様は一回ここに来たであらひ、
で、実力はどうのほどなのだ勇者様は」

「はい、洞窟の地下2階まで来ましたが、途中で引きかえしました
ダ。

初級冒険者レベル5から8程度かと思いますダ」

「次は客人であるが故、丁重にもてなすのだぞ」
（なんと、まだ弱いらしい、ベルゼブブに軽くあしらわれてしまつ
ぞ）

「はあははー姫の仰せの通りに」

ホブゴブリンはスパイに平伏した。

「万事手はず通りたのむ。」

スパイはみたらじ団子を口にいれながら、指示をした。

勇者と僧侶が洞窟の入り口に着くと辺りは静まりかえっていた。

「こゝの前、来た時と様子が違うぞ。もつと洞窟の奥からゴブリンのうめき声や叫び声がしたのに」

「誰か先に来て倒してしまったのでは？」

「考えられるな、とりあえず慎重に進もう・・・」

勇者達が洞窟に入らうとするとき、ホブゴブリンがやつて来て、勇者に手紙を渡し去つていつた。

「なんだ、今の向々・・・」「

【手紙の内容】

洞窟の地下5階に可愛いく気高く美しい女を誘拐し、監禁している。同封の地図を参照に進むべし、宝箱も罠を解除して開けてある。宝箱マークしてあるので、回収しつつ進むべし。早く来ないと女を食べてしまつだ。

「なんか、おかしくないか、この手紙の内容」

「とりあえず女の人があにいるよですから助けにいきましょう」

勇者達はサルバトーレ城で買えなかつた。武器、鎧を宝箱から回収しつつ、地下5階に進んで来た。壁には矢印の案内板までついてる始末。

「ずいぶん親切だな。こちちは行き止まりです。だつて」

「ゴブリンも、全く会こませんね。出でくるのはゴウモリ、虫系のモンスターばかりです」

その時――

「勇者様――助けて――」

女の声が洞窟内に児玉した。

第十一話 出会い

「親分～勇者様が間もなく来ますダ」

「わかつているだううなー私と勇者様は、ダイナミックかつロマンティックかつ
ドラマティックに会わなくてはならない。多少の演出は必要だ！」

「もう演出じこりないんじやないかな？やり過ぎじゃない意味わからぬ。」

「オラあ、姫様の為に、寝ないで台本覚え・・

「黙れ！もう来る一手加減するなよー。」

「うおおおおおお

ホフゴプリンは興奮して胸を叩いた！そこへ勇者と僧侶が駆けつけた。

「よ・く・じこま・でーたたたただづつけたダ・・褒めてつつつかわ
(緊張しちゃダメダ。姫様のマヒダ。恥かかすな・・・)

(このアホが！棒読みではないか！)

「おい、女人は何処だ！」

「えーっと、えーっと、しししんぱいしなくともも

(· · · ·)

「あそこ」の鉄格子にいますよ勇者やん」

「よーし戦闘開始だ！」

ホフゴブリンは僧侶を斧で横に振るつた。

「うわあああ

僧侶は壁に激突した！

「大丈夫か！シモン！」

「オラー！頑張るだー！」

ホフゴブリンは斧で勇者の真正面に振り下ろした。
勇者の持っていた鉄の盾は間まつ立つに割れた。

(あーあー勇者じこ)でTHE ENDやつと魔界に帰れるよ
悪魔の杖が目をつぶつた瞬間

「くおおおおらつああああ

洞窟内にとてつもない魔王の声にた雄叫びが児玉した。

「ヒィイーヒィイーヒィイー」

ホフゴブリンは立ち尽くし足がすくんだ。

「オラもう降参しますダ。もう悪いことしませんダ。約束しますダ

ホフゴブリンは武器を捨てて謝りだした。

勇者はスパイを救出して、ゴブリンの洞窟から脱出した。

第十二話　自己紹介

「それにしても、さつきの魔物のうめき声はなんだつたんだ。」

勇者達はサルバトーレの城下街に戻ってきた。

（あれはね魔王の雄叫びって言って知能80以上の人型魔物に効果があるんだよ）

悪魔の杖は心でつぶやいた。

「まあみんな無事でよかったです。突然、謝りだしたなホフゴブリン。」

「勇者様、助けて頂いて有難うござります。」

「君は帰る場所がないの？」

「そうなんです。私のお師匠様がお亡くなりになつて、親もいない私は天涯孤独の身なんです。」

「そりなんだ」

（よく、そんな嘘が次々と出てくるな。魔王様、泣いたらうつよー）

「君は魔法使いなのかな？職業は何？」

「えーと、ドラゴン魔法戦士です。」

「聞いたことない職業ですね。」

(セリヤセリヤだよ。スパイがさつきかんがえたんだもん)

世の中知らない事もあるもんだといつ事で解決した。

「あなたの武器杖ですか、邪悪な氣が出ていますね。呪われている
かもしませんよ」

僧侶シモンはスパイの悪魔の杖が氣になるようだ。

「あーーーこれは氣にしないで、たまにしゃべつまかせ」

「えりしゃべるの武器なのに」

「しゃべって悪かったなクソ坊主ーお前を呪つてやれりがー..」

「しかもト品だ・・・」

「これで勇者、僧侶、ドラゴン魔法戦士といつパーティーになつた
な。ドラゴンいるの?」

「外にいますわ。飛竜ですの。冷却ブレスを吐けますのよ」

(そんな頼もしい奴いるのに、よく誘拐されたね。)

勇者と僧侶は同じ事を考へたのだった。

第十四　退屈

勇者と僧侶は前線でモンスターと戦っていた。

相手は豚の化け物 キングトーンとサイの化け物 突撃サイである。

キングトーン 鎧と盾と剣を持って一本足で襲いかかる豚モンスター
突撃サイ サイに装甲のトゲのついた鎧で突撃する

初級サイのモンスター

(こんな雑魚、上級魔法ですぐ全滅できるけど、そうしたら勇者様の経験値上がらないわ)

スペイは後方から飛竜に乗りファイヤー【火の属性】アースバリア

【土の属性】など初級魔法を唱え。勇者を支援していた。

「やったーモンスター倒したぞ！やったあ！」

「私レベルアップしました。回復魔法、ゲンキマンーを覚えましたよ」

ゲンキマンー ヒットポイント30回復する初級回復魔法

「よかつたな僧侶、それにしてもスペイは、レベル上がらないな何でだろうな？」

(私のレベルは50は超えてると思うわ、多分、魔界に行くまではレベル上がらない)

「スパイ、勇者にもあつたし、もう魔界に帰ろうよー」
悪魔の杖はスパイの耳元で囁いた。

「…………」

スパイは悩んでいた。このまま勇者といるべきか、魔王に謝り魔界へ戻るか。

その頃魔界の魔王城では
大魔導士グラハーゴンと大魔王ダークドラゴンが今後のスパイ姫の
対策について話していた。

「魔王様、ベルゼブブから伝令小蠅が参りました。スパイは帰る気
持ちはないそうです。」

「ベルゼブブめ、頼りにならんな。ジョーカーを呼べ！」

「ま・まさか、殺人請負人ジョーカーを呼ばれるのですか！今まで
殺してきた冒険者は100000人、スパイ姫では絶対に敵わない相
手ですぞ。」

「勇者を暗殺してもらおう。死んでしまえば、諦めて戻つてくるだ
ろ？」「

(ジョーカー危険すぎる。スパイ姫を守る為にもベルゼブブに連絡しなくては)

魔王の王室に殺人ジョーカーが呼ばれた。

「イエーイ、俺っちがきたからには、もう安心安心暗殺安心お休みなさい?」

「ジョーカー寝てはいかんぞ!」

「はつ俺っちとした事がイエーイ」??

「お前はフザケタ奴だが、ちゃんと任務はこなすので期待してるぞ!」

「邪!行つてくるぜ、トイレジやないよイエーイ」??

ジョーカーは身なりはシルクハット顔は狂った感じ顔半分はゆがんでいるいつもグニョグニョ動いている。
背中には巨大な鎌死神族である。

「さつと王の間から出て行ってくれんかジョーカー」

「おおーっとヤベえスタコラサッサ!イエーイ」??

ジョーカーは横走りで王の間を出て行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747y/>

スパイス(普通の勇者の物語)

2011年11月27日21時09分発行